

F・タスティン著、齋藤久美子監修・平井正三監訳

『自閉症と小児精神病』

評者・小林隆児



創元社
本体三五〇〇円

精神分析的研究の主たる対象は、神経症から境界例へ、今では精神病あるいは自閉症に移りつつある。この数年、自閉症に関する精神分析的研究の翻訳活動が活発になつてゐるが、そのような中で出版されたのが本書である。発刊一九七二年、三五年近くを経たの翻訳出版である。それでも訳者らが翻訳に踏み切つたのは、本書に自閉症、小児精神病の精神分析的理解における古典ともいえる価値があつたからに相違ない。

今や自閉症の精神分析的治療に対する風向きはきわめて悪い。日頃耳にするのは批判的言辞ばかりである。過去の自閉症心因論、環境因論に対する嫌悪ともいえるほどの強い批判からである。

しかし、著者タスティン自身も述べているように、自閉症という(精神)発達障害も個体要因としての素質と(養育)環境の交互作用の結果生まれ

たものであることは今さらいうまでもないことである。横断的に明らかにされてきた脳の機能的あるいは器質的変化は、これまでの発達の結果として捉えることはできるとしても、それをもつて自閉症の原因部位だと短絡的に関連づけることには慎重でなくてはならない。数十年前まで心因疾患と考えられていた精神疾患に脳の機能的あるいは器質的変化が見出されることは今では珍しくないのである。素質と環境の諸要因がどのように絡み合つて今現在の心身の変化が生まれてきたのか、その発達変容過程を重視した接近方法が今切実に求められていると思う。

わが国における自閉症理解と治療(教育、援助)の基本にはアメリカを中心とした実用主義的傾向が強く影響を及ぼし、自閉症児にどのような能力障害があるかを明らかにし、それに対して心理教育的接近を行うのが正道であるとの共通認識が広がっている。し

は、自閉症の人々のこのころのあり方に対する理解である。

自閉症の人々のこのころの理解が難しいのは、ひとつには彼ら自身がみずからこのころを語ることが困難であることによる。たとえ、成人になつた自閉症者が語る手記をおして彼らのこのころを垣間見ることができても、それをもつて彼らの乳幼児期のこのころが明らかになるわけではない。われわれの共通理解を可能にしてくれる象徴機能をも有することばの獲得に最大の問題を抱える自閉症の人々のこのころの世界、つまりは象徴機能獲得以前の世界を描くということの難しさである。語ることのきわめて困難な自閉症の人々のこのころの世界を、厳密な治療設定の枠内での精神分析的治療で感じ取つた生々しい体験をおして、著者独特の詩的表現で語つたものとして、本書は大変貴重なものである。

タスティン自身、後に本書の表題を『小児精神病の自閉状態』のほうが正しいと言ひ直したように、本書で述べられている事例は、われわれが自閉症として一般的に想像するものとはかなりかけ離れている感が強い。小児統合失調症、小児精神病、あるいは小児共生精神病と称されてきた子どもたちを

線型自閉症の中にも本書に類似した事例があるように思われる。訳者のひとり辻井も述べているように、今日では虐待がらみの深刻な自我障害を呈している事例を想定するのが適切かもしれない。そのようにして本書を再読していくと、生まれてこれまで重要な他者との間で関係が成立しないという問題を抱えた子どもたちのこのころのあり方が、われわれの想像を絶するものであることを多少なりとも窺い知ることができる。しかし、それは「名状し難い恐怖」で、語り尽くせるものではない。

精神分析的接近は人間のこのころの理解にとつて欠かせないものである。しかし、素質と環境の關係の質的検討が今後の課題となつてくることを考えた時、精神分析的探求の視点はあくまで「個の中の關係」であつて「關係の中の個」ではないところに物足りなさがある。人間はあくまで關係の中で変容し、その体験が個の中に取り入れられて収斂していく存在とすれば、「關係」の内実をさらに明らかにしていくことが、自閉症と精神分析に対する今日の閉塞的な状況を変えていく一つの契機になりはしないかとも思う。

(こばやし・りゅうじ／東海大学健康科学部
社会福祉学科)